

「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそ
うらいき。

第10章 無義をもって義とす

北第3組 即信寺住職

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」、この一節は「念仏は無義なり。不可称不可説不可思議のゆえに」と言っても意味が通じそうですが、「無義をもって義とす」と表現されているところに、大切な視点があるのでしょうか。宗祖は『御消息』にも、繰り返し繰り返し同じ表現をされておられます。

文中、「無義をもって」の「義」は、「行者のはからい」を表し、後の「義とす」の方の「義」は「如来のはからい」を表すと先達は指南されています。これによって直訳すれば、「念仏には人間の思慮分別を加えないというのが、如来の教えたもう救いの道理なのだ」という意味になるのでしょうか。

私たちは「念仏は人間のはからいを超えた如来の大道である」ということを常に教えられています。しかし、その「如来の教えたもう義」を「人間の義」に取り込んで結論づけるという問題をいつも抱えています。「他力他力と調べてみたが、思う心がみな自力」（森ひな）という言葉がありますが、この誤謬に気づかず、こちらの思慮分別のモノサシに合わせて教えをつかんでしまうという問題を問うているのがこの言葉なのでしょう。そこに私たちの自我執着の根深さが教えられます。

例えば、第九章では「念仏を申しながらも大きな喜びがなく、浄土へ参りたいという心が起こらない」という不審を唯円房が訴えています。これは「念仏を申すところには大きな喜びがあり、浄土往生を熱望する身となるはずだ」という「人間の義（はからい）」に立って教えを取り込んでいくことから起こる疑義です。これは邪見・分別であり、さらにそれに執られるという「煩惱の

所為」なのです。煩惱は喜びに満ちあふれ、浄土を願う立派な念仏者になることを夢見るからです。

念仏によって往生一定と定まるということは、そのまま凡夫一定と定まることです。しかし、往生を夢見ながら、凡夫と定まることが嫌うのが煩惱のはたらきです。ブレない自分を理想とし、凡夫という自身の本当の姿を受け入れることを妨げるのが煩惱の所為です。

また、「死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも煩惱の所為」なら、逆に死に向かってオロオロするような自分ではダメだと、その自己を否定するのも煩惱の所為なのです。その煩惱・分別・執着の心こそ、自己に背き、自己を阻害するものなのです。しかし、私たちは、その心に立って救いを求め、教えを聞き、義を立てていきます。その限り、決して真の安心とはならず、「安心なはずの慰め」に終始するのでしょう。

釈尊は韋提希を「汝はこれ凡夫なり」と呼ばれました。しかし、「凡夫はダメな者だ」とは言っておられません。凡夫というのは突き放した言葉ではなく、その自覚を通して救わんとする仏の大悲の言葉なのです。私たちは凡夫の自覚に立てないが故に、教えを聞きながら、自分で自分を助けようとして如来に背き、自己に背く義を立てて、かえって自己を縛りつけて苦しんでいくのです。

底なしの迷いということを言いますが、それは、邪見・分別をもって教えや自身に常に底をつけていく執着から抜け出せないということが底なしということなのでしょう。

ですから、助かるといっても、凡夫が無執着になるということではありません。執着を離れるとは、執着していることに気がつく、自覚するということです。自分の執ということに気づかされることは決して闇ではありません。むしろ、執着している自覚がないときは、自分は大切なものを守っているのだと、煩惱に立った夢にしがみついているのであり、そのことが闇なのです。それが思いに過ぎなかったと気づかされる場所に初めて光明が注がれるのです。

臨終の一念まで底なしの迷いを生きるのが人知です。しかし、それに寄り添わんとする仏智もまた無崖底なのです。それこそが、不可称不可説不可思議なる如来の義なのです。